

現代知識人論序説

——知識人の両義性とその未来——

原 田 達

An Introduction to a Theory of Modern Intellectuals

——Ambivalence of Intellectuals and its Future——

Toru HARADA

はじめに——あるいは A.W. グールドナーのために

自己反省的社会学の提唱者 A.W. グールドナーが講演先のマドリッドで客死したのは1980年12月15日のことであった。享年60歳の若い死は、三部作 “The Dark Side of Dialectic”¹⁾ をかれの最後の代表作としてしまった。以下の論稿はこの三部作からおおきな刺激をうけている。そこでここでは、“The Dark Side of Dialectic” の基本戦略について概括し、以下の論稿の拠って立つ基盤をあきらかにしておきたい。「自己反省性」とはまず正直な自己暴露からはじまる。

この三部作は前作『到来する西欧社会学の危機』²⁾ と対をなす作品である。後期のグールドナーにとって考察すべき対象はふたつあった。ひとつは硬直した講壇社会学の批判であり、ここから「社会学の社会学」の提唱がでてくる。前作『到来する西欧社会学の危機』はこのような問題意識のもとにうまれた。そしてもうひとつの対象がマルクス主義である。グールドナーにとって社会学とマルクス主義はたがいに対立しあった社会科学の双壁であり、前作で社会学を批判したかれは、かえす刀でマルクス主義に立ちむかってゆく。三部作 “The Dark Side of Dialectic” は「マルクス主義の脱神秘化」をめざして書かれたものであった。

社会学とマルクス主義にたいするかれの距離のとり方は独特であり、その危うい立場こそが A.W. グールドナーであると言ってもよい。かれはこう言うのだ。

1) 三部作 “The Dark Side of Dialectic” は次の作品によって構成されている。

• *The Dialectic of Ideology and Technology, The Origin, Grammar, and Future of Ideology* (New York, 1976)

• *The Future of Intellectuals and the Rise of the New Class* (New York, 1979)

• *The Two Marxisms, Contradictions and Anomalies in the Development of Theory* (New York, 1980)

2) *The Coming Crisis of Western Sociology* (New York, 1970) 邦題『社会学の再生を求めて』(新曜社, 1974).

「わたしじしんの立場は本質的に尾根に立つ者のそれである。つまり半分は社会学者であり、半分はマルクス主義者だ。そしてわたしは、そのどちらにも反逆する。」³⁾

対立しあうものとともに依拠しつつ、どちらにも反逆する。それは困難な途ではあるが、しかしかつてマルクスがとった立場でもあった。こうしてかれは「マルクス主義者のアウトロウ」と自称し、自己の社会学を「新ヘーゲル派社会学」、「ヘーゲル左派社会学」と呼ぶ。みずからをそう呼ぶことでかれが意図したことは、かれの社会学が矛盾を矛盾として受け入れる社会学であるという自己規定であった。それは、矛盾にたいして開かれている認識パラダイムの提示であった。「ヘーゲル左派社会学は、不調和であることを現実の一部として受け入れる」⁴⁾のである。

「不調和」にたいして寛容であろうとする認識論的態度は、「客観性」についてのかれの考えにはっきりと示されている。⁵⁾「客観性」とはなにかを考えるにあたって、かれはまず、ある情報が受けいれられる社会的文脈に注目する。情報は、そのすべてが等価なものとして受信者（研究者）に受信されるのではない。情報は、それを「都合がいい」・「わるい」と判断する受信者の価値意識をとおして受信される、とかれは言う。「都合がいい」情報は受信されやすく、「都合がわるい」情報は受信されにくい。とすれば、情報のこの偏倚した受信構造を問題とせず「客観性」を情報処理の「正しい方法」の問題に還元してしまうことは無意味なことであり、ましてや「客観性」を「中立性」と同一視することはできない。

では、「客観的」であろうとすればどうするのか。ここにグールドナーの基本的な戦略的視座を見ることができる。かれは、それは「都合のわるい」情報にたいして開かれていることだ、と言う。言いかえれば、それは徹底したリアリズムである。かれにとって「客観性」とは、「不調和」である現実をそのまま受け入れるリアリズムに他ならない。

社会現象にたいするこのような視点は、なにも円熟したグールドナーがはじめて提示したものではない。すでにかれの初期の著作のなかにこのような視点ははっきりと示されており、またこれこそがかれの社会学的分析を特徴づける視点であった。たとえば『産業官僚制のパターン』の結論部には、次のような叙述が見うけられる。「官僚制規制は、こまかな監督を導くにいたる緊張を維持するがゆえに存続する。」⁶⁾（傍点著者）矛盾に開かれた認識パラダイムは、認識の対象を矛盾したものとして描きだす。このような官僚制把握は、ヴェーバー流の「合理的モデル」からはけっして導かれることのない結論であった。

矛盾に開かれた認識の枠組の提示、それによって社会現象を矛盾の体系としてとらえる立体

3) Gouldner, A. W., *The Dialectic of Ideology and Technology*, p. xiv.

4) Gouldner, A. W., *The Future of Intellectuals and the Rise of the New Class*, p. 6.

5) Cf. Gouldner, A. W., "The Dark Side of Dialectic: Toward a New Objectivity." *Sociological Inquiry*, 1976, 46(1), pp. 3-15.

6) Gouldner, A. W., *Patterns of Industrial Bureaucracy*, (New York, 1954) p. 242 (岡本・塩原訳『産業における官僚制』ダイヤモンド社, 1963年, 271頁)。

的把握、これらは『到来する西欧社会学の危機』ではいっそう鮮やかになる。たとえばグールドナーは、社会学におけるプラトン主義と機能主義を無矛盾的な認識の枠組をもつものとして批判する。つまり、それらが善と悪を別々の世界に帰属させてしまい、「現実⁷⁾は矛盾したものではない」と認識した点を衝く。このような認識には現状維持へと墮す危険があり、そこからは世界の変革へとむかう運動のイメージがでてこないのである。

しかしこのことは、かれが痛烈に批判した講壇社会学という社会現象がたんなる悪であり、ただ廃棄すべきものである、ということの意味するのではない。かれは講壇社会学という認識対象をも矛盾をはらむものとして描きだす。たしかにそれは保守的イデオロギーを代表するものではあるが、しかし19世紀以来の実証主義の流れをみても、それをまったく反動的なものとすることはできない。講壇社会学はまた「解放的潜勢力」をもっているのである。

「講壇社会学は解放的な側面と抑圧的な側面とをともに有するという両義的な構造をもつのである。……社会学のなかには、社会学それ自体を變形していくための梃子となる力を与えるような、強力な矛盾が存在しているのである。⁸⁾」

でなければ、グールドナーはみづからを説明できないことになる。

ところで、「解放的潜勢力」という講壇社会学の「明るい側面」にもグールドナーが注意を喚起したとすれば、それは、従来この社会学と対立してきたマルクス主義の矛盾を暴きだす努力と対応していなければならない。しかもこの作業の方がより重要な意味をもっていると思われる。なぜならこの作業は、マルクス主義の、さらには「アウトロウ」とはいえ「マルクス主義者」と自己規定したグールドナーじしんの矛盾の「暗黒の側面」を直視しようとするものだからである。“The Dark Side of Dialectic” とは、このことを指している。

では、矛盾をはらんだマルクス主義とはなにか。矛盾はマルクス主義と知識人の関係にはつきりあらわれている、とグールドナーは言う。⁹⁾マルクス主義は理論を賞揚し、社会主義の実現のためにも理論を必要とするにもかかわらず、理論家を信用しない。またマルクス主義は、それをうみだしたマルクスとエンゲルスを説明できない。ここに重大な矛盾が存在する。

しかし、さらに重要なことは、たんにこのような矛盾が存在しているという事実ではないのだ。もっとも肝要なことは、この知識人にたいする不信はやがてマルクス主義じしんへの不信に転化しようとすることであり、しかもそこから新たな運動が発生する可能性があることである。

「理論と理論家にたいして両義的であるマルクス主義は、マルクス主義じしんにたいして

7) Gouldner, A. W., *The Coming Crisis of Western Sociology*, p. 418 (邦訳第三巻108頁)。

8) Ibid., p. 441 (邦訳第三巻141頁)。

9) Cf. Gouldner, A. W., “Marxism and Social Theory” *Theory and Society*, 1974, pp. 17-35.

も両義的たらざるをえないことを意味する。…… マルクス主義は、打ち敗かされるべき敵は一部は自分のなかにも存在するという暗示をもっており、『永続革命』の究極の意味はいはみずからを超越することにあると気づきはじめている。マルクス主義は、永続革命は己れじしんにたいする革命たらざるをえないことを理解しはじめるのである。¹⁰⁾ (傍点著者)

したがって、グールドナーがマルクス主義批判でめざしたものは、その(そして自分じしんの)「暗黒の側面」を見つめ、これを媒介にして「永続的」な運動へと乗りだしていこうとする弁証法的な歴史把握の構築である。そのための恰好の素材が知識人であった。それはまたグールドナーにとっては必然的な過程でもあった。つまり、「反省的」知はかならず一度は知識人論を語らざるをえない。

さて、「新ヘーゲル派社会学」は対象を矛盾の体系として描きだす。知識人もまず矛盾した両義的存在としてまずとらえられよう。しかし、問題はその後である。知識人の両義性はいかなる未来の像をむすぶのか。その「暗黒の側面」はいかにして「永続的」運動へと転化されるのか。以下の論稿の主要なテーマはここにある。

—

マルクスがド・トラシのイデオロギー概念をネガティブに翻訳したとき、かれが意図したことは、アイデアの体系や社会意識はそれじたいが自律的なのではなく、社会的存在にもとづいていることの証明であった。神学批判、ドイツ観念論批判、古典経済学批判などは、それらもちいる諸観念の体系の脱文脈性と自律性への批判であり、したがってマルクスの努力はこれらの「イデオロギー」をそれにふさわしい社会的文脈にふたたび位置づけることであった。イデオロギーの階級的性格が暴露される。

ところが、この論理を押しつめてゆくと厄介なことがおこる。マルクスじしんが説明できなくなるのだ。マルクスじしんはいかにして存在からの規定性をまねがれるのか。なるほどかれはこの点をこう説明する。

「共産主義的自覚は、労働者階級の立場を洞察することができれば、他の諸階級のうちにも形成されう¹¹⁾る。」(傍点原田)

「全歴史的運動を理論的に理解するところまで努力して到達したブルジョア思想家の一部が、プロレタリアートの¹²⁾のがわにうつてくる。」

10) Ibid., pp. 26~27.

11) マルクス、エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』(花崎皋平訳、合同出版) 78頁.

12) マルクス、エンゲルス『共産党宣言』(マルクス・レーニン主義研究所訳、大月書店) 40頁.

たしかにここでマルクスは、区別された Sein と Sollen を観念的に「歴史」へと統合したヘーゲルを転倒させて、必然性を洞察する「科学」のなかでこれらを統合しようとしている。しかしそれでもなお、いかにして科学的「洞察」は状況を超越するのかという超越のメカニズムの問題はのこるし、なによりも史的唯物論の公式との関係が不鮮明のままである。「社会的地位からすればブルジョア・インテリゲンチヤ」マルクス¹³⁾(レーニン)と「科学的社会主義」の内的連関は放置されたままであった。マルクスは「反省性」¹⁴⁾を欠いていた。

周知のとおり、この難問にひとつの解決をあたえたのが、マンハイムの相関主義であった。「動的な相関主義」は、状況に規定されて生じる種々の知的要素をたがいに相関づけることによって、意識の歴史性と超越性のアンチノミーを克服しようとする。このとき相関主義にとってまず必要とされるのは、相関づける主体の徹底した「反省性」であった。相関主義はまず自己の意識を相対化するという「反省性」をもたなければならない。

「自己崇拜をたえまない反省を通じてつねに相対化すること、こういう仕方では、自己の不完全さを補ってくれるものにたいしていやでも自分を開いていること」¹⁵⁾(傍点著者)

これが相関主義の前提である。マンハイムもまた、自己の「暗黒の側面」を注視しようとしたのだ。

相関主義という認識論上の戦略をえたマンハイムは、もはや自己（そして知識人一般）と存在との関係に苦慮する必要はなかった。規定をうけつつ、相関的視点をもつことによって規定をまねがれる存在、マンハイムにとって知識人は、まずこのような両義性のなかでとらえられる。

両義的存在としての知識人というイメージをマンハイムが提示するのは、神学者ホル批判においてであった。ホルがミュンツァーの宗教改革理念が知識人をもとらえたという歴史的事実を提示してヴェーバーの類型論の無効を言いたてようとしたとき、マンハイムは「知識人の社会学的帰属が問題になるばあいには、もっと特別に慎重なやり方でやらなければならない」¹⁶⁾とホルを批判する。このときかれが提示するのが、「知識層の社会学的両義性への問い」の必要性であった。知識人は、あれこれの理念を単線的に受容するのではない。かれらには理念を受容するさいの独特な精神的「屈折角 Brechungswinkel」があるのであり、この「屈折角」が知識人を両義的存在にする、とマンハイムは言う。マルクスがつまづいた「洞察」や「プロレタ

13) レーニン『なにをなすべきか?』(村田陽一訳、大月書店) 50頁。

14) Gouldner, A. W., *The Dialectic of Ideology and Technology*, p. 45.

15) Mannheim, K., *Ideologie und Utopie*. (Frankfurt am Main, 1952) S. 76 (高橋・徳永訳『イデオロギーとユートピア』中央公論 197頁)。

16) Ibid., S. 197 (347頁)。

リアのがわへの移行」の問題は、こうして処理されてゆく。

しかしマンハイムは、知識人の両義性の内容を徹底して問いつめることはなかった。比喩的に言えば、「屈折角」がたえずとる一定の傾向を測定することはなかった。なぜなら、かれにとって重要だったのは、相関的視点をもつことで知識人は状況をこえるのだという論拠を示すことだったからだ。その超越が社会学的にどのような内容をもつのか、どこへむかっての超越なのかは、かれにとって二次的問題であった。だからこそマンハイムは知識人の「使命 Mission」とか、「自己の社会的¹⁷⁾位置とそこから生じる使命との具体的自覚」(傍点著者)という社会学的に無色なテーゼへと到ってしまうのである。

このことは、「社会的に浮動するインテリ層」という有名なテーゼにはっきりとあらわれている。かれが『イデオロギーとユートピア』においてもとめたものは、いくつかの政治的知識(存在に拘束された諸イデオロギー)を綜合する主体であり、「インテリ層」がこの主体とみなされる。かれらは共通して「教養」をもち、「いつも実験的な態度、社会的な敏感さを養い、ダイナミズムと全体性をめざす態度」¹⁸⁾(傍点著者)という「独自の特質」をもっている。またかれらは「比較的階級色をもたず、社会的空間のなかでそれほど固定した地位をもたない」ゆえにイデオロギーの綜合の担い手となりうるのだ、とマンハイムは考える。しかし、だからこそ、かれらは無色なのだ。マンハイムは「浮動するインテリ層」の未来をどう描いたか。かれは、その未来はふたつあると言う。

「第一は、主として自由な選択にもとづいて、そのつど抗争してやまないさまざまな階級へみずからを¹⁹⁾加担することであり、第二には、自己の根底への自己省察の道、いいかえれば、全体がもっている精神的関心の代理人として運命づけられている自分の使命をたずねること」(傍点著者)

当然のことながら、マンハイムが賞揚するのはマルクスやグラムシ流の第一の途ではなく、「自己省察」によって「全体」なるものを代表しようとする第二の途である。しかしこれは、精神的貴族主義と言わねばならない。じじつ、かれのイメージする知識人とは、「意識的、無意識的に、将来の立身出世とは別のなにかをめざしている少数の精神的な人々」²⁰⁾なのである。

なぜ、こうなるのか。それは、マンハイムが知識人にはかれらじしんの特殊な利害関心があることを想定できなかったからである。良くも悪しくも、相関主義がマンハイムを拘束した。「さまざまな傾向が衝突しあう全体の渦」から身をひきはなすことに急であったかれは、知識人

17) Ibid., S. 139 (275頁).

18) Ibid., S. 135 (270頁).

19) Ibid., S. 138 (273頁).

20) Ibid., S. 221-222 (377頁).

じしんのなかに存在する特殊な傾向を見おとしてしまった。問題は、知識人のもつ知識が「社会的文脈をこえた」妥当性をもっているという事実ではない。かれらがそのような知識の「独占的な所有者」であり、これによってかれらに開かれる社会的地位と未来が問題なのである。²¹⁾マンハイムの知識人が無色だというのは、このことを指している。

なるほどマンハイムは知識人の両義性という視点をひらいた。しかしかれは、この両義性をイデオロギーの綜合の担い手としてポジティブに統合してしまった。それはかれが、対立しあう他者—他者関係のみを前提とし、これとの関係において知識人の位置をとらえようとしたからである。しかも、他者—他者関係の外部に立つことを知識人の知識人たるゆえんだと考えたからである。しかしこれでは、知識人じしんの両義性については不鮮明におわる。わたしたちは、この両義性にたいしてもうすこし慎重であってもよいだろう。慎重であるとは、自己の「暗黒の側面」にたいして目を配るということである。「自己省察」をさらに押しすすめること。

二

「自己省察」を押しすすめるための材料は、知識人論が提供してくれる。すでにおおくの知識人論はあり、しかしいまだ統一した知識人のイメージは形成されていない。そしてこの事実こそ、知識人がそれじたいとして両義的であることの傍証となる。

知識人論の混乱の様相は、次のハリントンの表を見ればいい。かれは、知識人について語る知識人の立場を左翼と右翼に、かれらが知識人にたいして下す評価を善と悪に分類してこの表を作成したのだが、ここから浮かびあがる知識人のイメージは、左翼にも右翼にもともに歓迎されつつ忌諱される、得体のしれない存在、まるで「精神分裂病的性格」(コンラード&ゼレーニイ)²²⁾をもった存在というイメージである。この相反し矛盾したイメージこそ「新ヘーゲル派」社会学にとってはリアルな現実把握ということになる。

このような混乱した状況のなかで、すでに知識人論の整理および知識人の類型化の試みはおおく存在する。²³⁾シルズ、²⁴⁾モルナール、²⁵⁾リップセット&ベイズ、²⁶⁾ブルース・ブリッグス、そして²⁷⁾グールドナーなどその例は枚挙にいとまがない。ここでは便宜的に次のように知識人論を整理し

21) Konrád, G., and Szelényi, I., *The Intellectuals on the Road to Class Power*, (New York, 1979) p. 32.

22) Ibid., p. 22.

23) Shils, E., "Intellectuals" in *International Encyclopedia of the Social Sciences*. 1968, Vol. 7, pp. 399-415.

24) Molnar, T., *The Decline of the Intellectual* (Cleveland, 1961).

25) Lipset, S. M., and Basu, A., "Intellectual Types and Political Roles" in Coser, L. A., (ed.) *The Idea of Social Structure* (New York, 1975) pp. 433-470.

26) Bruce-Briggs, B., "An Introduction to the Idea of the New Class" in Bruce-Briggs, B., (ed.) *The New Class?* (New Brunswick. 1979) pp. 1-18.

27) Gouldner, A. W., *The Future of Intellectuals and the Rise of the New Class*. esp., pp. 6-8.

知 識 人 へ の 諸 態 度

左 翼		右 翼	
善	悪	善	悪
サン・シモン K. カウツキー L. ボーダン T. ヴェブレン D. バゼロン J. K. ガルブレイス C. W. ミルズ チェコ科学アカデミー A. トゥレーヌ A. ゴルツ S. マレ R. ガロディ S. カリロ	バクーニン マハイスキー L. ローラット M. シャフトマン M. ジラス フランクフルト学派 A. ゴルツ B & J. アーレンライヒ	パレート D. モイニハン D. ベル	J. シュンペーター L. フォイヤー J. バーナム D. モイニハン D. ベル I. クリストル

資料 Harrington, M., "The New Class and the Left" in Bruce-Briggs, B., *The New Class?*
p. 127 より引用

ておこう。²⁸⁾「便宜的に」というのは、ここでの目的が知識人論の整理にあるのではなく、知識人の多様で矛盾したイメージを抽出することにあるからである。

1. 「恵みおおきテクノクラートとしての新しい階級」²⁹⁾——これはブルース・ブリッグス流に言えば、「社会実証主義」の立場である。ここでは知識人(もしくは「新しい階級」)は、全体社会に奉仕するテクノクラートとしてとらえられる。科学技術の発展がもたらす社会の合理的編制を肯定的にとらえ、「技術的インテリゲンチヤ」の機能的卓越性に注目するのである。この立場の始源は19世紀初頭の「知の支配」の発想、つまりベンサムやサン・シモンまで溯ることができようが、現代の代表者は「テクノストラクチャー」論(ガルブレイス)や「脱工業化社会」論(ベル)であり、また「成長理論」³⁰⁾や社会主義「科学技術革命」論³¹⁾のなかにもその影響をみることができる。いわば科学技術がもたらす社会変動という事実と社会的目的論を一致さ

28) 以下の整理はグールドナーのそれを参考に行っている。しかし、かれの分類をそのまま用いてはいない。

29) 本稿では知識人が特殊な階級を構成していることを前提として、「新しい階級」と知識人を同義として用いる。本稿で用いるターミノロジーを図式的に示すところなる。

知識人———人文系知識人
「新しい階級」———技術的インテリゲンチヤ

30) Cf. Rostow, W. W., *The Stages of Economic Growth, A Non-Communist Manifesto*. (London, 1960), (木村・久保・村上訳『経済成長の諸段階』ダイヤモンド社 1961) and also cf. Kerr, C., et al., *Industrialism and Industrial Man* (Cambridge, Mass., 1960) (中山伊知郎監修, 川田寿訳『インダストリアリズム』東洋経済新報社 1963)。

31) Cf. Современная научно-техническая революция. Историческое исследование (Москва, 1970) (山崎・金光訳『現代科学技術革命論』大月書店, 1974)。

せようという立場である。

しかしこのような立場にたいして、容易にわたしたちは次のような疑問を提示しうる。はたして知識人は全体社会に奉仕する「無私」の存在なのか。かれらは科学技術や普遍的概念（たとえば「人権」、「自由」、「平等」など）を用いながら、じつはかれらじしんの特殊な利害関心を追求し、安定した社会的地位を得ようとしているのではないか。さらに今日の「技術社会」（エリユール）がもたらす管理社会化と人間疎外は、かれらの言う社会の合理的編制が実質的に非合理性に転化していることの証明ではないのか。したがってわたしたちは、テクノクラシー論の検討のなかに科学技術の解放性と抑圧性、テクノクラートの関心の一般性と特殊性というアンビヴァレンスをみることができる。

2. 「支配階級としての新しい階級」—— いま述べた1の立場への批判の論拠をこの立場が提供してくれる。その始源に立つバクーニンは、近代科学の支配性とこれと結びついた知識人の権力を徹底して批判する。よく知られているように、その批判の鋒先はマルクス主義知識人に主としてむけられた。したがってこれは、「エリート³²⁾の周流」論の社会主義版であった。

近代科学と知識人にたいするバクーニンの批判³²⁾は手きびしい。かれにとって近代科学は、人間の「生」の否定であった。それは「一般性だけを、法則だけを取り扱い」、「個々の生身の人間にたいして、なんらの感覚も心情も抱いてはいない。」実証科学は「民衆の生活の埒外に構成され、特権的集団によって代表され」ており、「みずから人間のいっさいの発達の絶対的かつ最終的な目的であるかのように自負」している。ここにバクーニンは実証科学の誤謬をみる。科学の発達を安易に目的論にすりかえる実証科学への批判 —— だからバクーニンの説くのは、「科学にたいする生の反逆、むしろ科学の支配にたいする反逆」であった。

この科学の支配の主体が知識人である。科学が特権的集団によって担われているかぎり、科学は「貴族主義」におちいり、知識人はかつて僧侶が保持していたのと同じ権力を握る。ただ神が科学的抽象にとって替られたにすぎない、というわけだ。バクーニンは明示していないけれども、1の立場の始源に位置するサン・シモンが産業者を貴族に、学者を聖職者に、そして科学を宗教になぞらえていたことは興味ぶかい。こうしてバクーニンは「あのいつも差し出がましく、常に自慢たらたらで、しかも相変らず無能な学者ども」への嫌悪をあらわにして、批判の鋒先をコントの弟子である実証主義者から「ドイツ共産主義の空論家の弟子ども」へと拡大してゆく。かれは「科学の名において樹立された権力」のすべてに反逆し、こうして「持つ者」と「持たざる者」の対立に加えて、「知る者」と「知らざる者」の対立を描きだした。この立場はやがてマハイスキーに受けつがれ、社会主義社会の実態を告発してゆく者たち（ジ

32) とくに、バクーニン『鞭のドイツ帝国と社会革命』（勝田吉太郎訳 中央公論 1967）308頁以下を参照。

³³⁾ ラス、シャフトマンなど）や全体主義論者たち（ラスウェル、ラーナーなど）に影響をあたえてゆく。

だがわたしたちは、次のような疑問をいだかざるをえない。知識人がたとえ支配階級を構成するにしても、かれらの支配はこれまでの支配とは質的に異っている。伝統や宗教、さらには資本にもとづく支配が有無をいわせぬ権力に依拠するのにたいして、知にもとづく支配は、すくなくともそれが普遍的言語を用いようとするかぎり、説得と同意から権力をひきだしてくる。つまり権力の正当化のメカニズムが質的に異っているのだ。さらに近代科学技術の否定的側面にのみ目をうばわれて、肯定的側面に目をとざすのは公平な態度ではない。科学技術は現実社会を「改良」してきたし、おおくの可能性を開いてきた。したがってその担い手である「新しい階級」は、すくなくとも一面においては全体社会に奉仕してきたのである。すでに述べたように、重要なことは科学技術の解放性と抑圧性、知識人の利害関心の一般性と特殊性をトータルに把握することである。

3. 「権力の下僕としての新しい階級」—— ここでは知識人はブルジョアジーの権力を支える下僕としてとらえられる。イデオロギー的にはかれらは、ブルジョア権力を支持する価値意識の再生産の担い手であり、技術的にはその機能的卓越性によってこの権力に奉仕する。したがって文化、経済、政治の各分野において知識人はその圧倒的能力によってブルジョア権力に奉仕するのである。この代表的思想家はチョムスキー³⁴⁾である。

だがこの立場も知識人の一面しか見ていない。これは後に検討するが、歴史上おおくの社会運動において知識人は重要な役割を演じてきた。宗教改革から社会主義革命まで、いちおうの成功をみた社会運動で知識人が関与しなかったものはない。また現代の世界情勢をながめてみても、体制のいかに問わず、運動の主たる担い手は知的社会層であるばあいがおおい。とりわけ社会主義社会においては、知識人の反体制的姿勢は鮮明である。68年の「プラハの春」とチェコ科学アカデミー、またポーランド「連帯」労組と労働者擁護委員会（KOR）の関係を想起すればいい。したがって、なるほど知識人が既成権力の下僕になることはあるし、その機会

33) ジラスの視点はきわめて経済主義的であり、その意味でバーナム『経営者革命』の社会主義版とも考えられるが、しかしかれが「新しい階級」と言ったとき、それは社会主義ビューロクラートを意味している。ジラスについて注目しておきたいことは、かれもまた「新しい階級」を両義的にとらえたことだ。たとえば、「新しい階級は、ブルジョアジーと同様に貧乏で強欲である。しかし、ブルジョアジーがもっていた倹節や節約の美德をもってはいない。かれらは貴族と同様に排他的ではあるが、貴族のもつ優雅さや誇高い騎士道はない。新しい階級は他の階級にくらべて利点ももっている。かれらは十分凝集性が高いので、偉大な犠牲やヒロイックな功績をあげることは十分準備している。……かれらはいくつかの点で他の階級より開放的であり、と同時に排他的でもある」とジラスは言う。Djilas, M., *The New Class*. (London. 1957) pp. 60-62.

34) Chomsky, N., *For Reason of State*. (New York 1970) (いいだも訳『ペンタゴンのお小姓たち』河出書房新社 1975). また、N. チョムスキー『知識人と国家』(河村望訳 TBS ブリタカ 1981) も参照せよ。

がけっしてすくなくないことも事実ではあるけれども、まったく逆に「知識人が status quo の守護者であることは稀だ³⁵⁾」ということも否定できない。この点をイデオロギー問題について言えば、かれらは既成の価値意識を学校、文学、マスコミなどを通じて再生産しつつ、しかし他方で新たな価値意識（たとえば対抗文化）の言語化と育成にも努めるのである。したがって、かれらが権力の下僕でありつつ墓掘り人でもあるという両義性を見失ってはならない。もしこの両義性を承認しないとしたら、わたしたちは社会変革の可能性を見いだすことができなくなる。イデオロギー的にも技術的にも圧倒的能力をもった知識人によって既成権力が完全に防衛されるとしたら、社会変革はありえない。可能な未来は、荒涼とした「一次元的」社会のイメージでしかないだろう。

以上のような知識人論の検討によってわたしたちは知識人のいくつかの両義性を析出することができるのだが、と同時に、知識人(論)のオプティミズムとペシニズムをそこに見ることもできる。たとえば1の立場も3の立場もともに知識人の圧倒的能力を承認するのだが、前者がこの能力を技術的オプティミズムによって解釈し未来に希望を託すのにたいして、後者はこれを政治的ペシニズムによって解釈し未来に絶望しか見いださない。さらにわたしたちは、技術的ペシニズムや政治的オプティミズムの立場があることも知っている。たとえばフランクフルト学派には技術的ペシニズムの色彩が色濃くあらわれているし、逆に知識人を語るマンハイムには政治的オプティミズムが強い。

ではなぜ、オプティミズムとペシニズムという相反するイメージを知識人はもたらすのか。その理由のひとつは、現実にかれらが解放勢力でありつつ抑圧勢力でもあったという歴史的両義性にもとづいていようし、またかれらのサディズム・マゾヒズム的な精神構造じたいにも依拠していよう。この点を説明しておこう。

I 歴史的両義性 —— さきにわたしは、歴史上おおくの社会運動において知識人は重要な役割を演じてきた、と述べておいた。しかし、この社会運動が単純に左翼運動と理解されるとしたら、それは誤りである。知識人は左翼革命にも右翼革命にも重要な関与をおこなってきたのである。したがって、「革命的知識人」(グールドナー)³⁶⁾という表現で左翼知識人だけを取り扱うことは誤りといわざるをえない。

いや、もともと左翼革命、右翼革命という表現が不適当なブルジョア革命においてすでに知識人は重要な役割を担ってきたし、そこにかれらの解放性と抑圧性を見ることがさえ可能である。コーザーが整理したフランス革命指導者の経歴を見てみるといい。³⁷⁾ダントン:弁護士、マラー:

35) Lipset, S. M., and Basu, A., *op. cit.*, p. 437.

36) Gouldner, A. W., "Prologue to a Theory of Revolutionary Intellectuals" *TELLOS*, 1975-76 Winter, No. 26, pp. 3-36 (永井務訳「革命的知識人論序章」『思想』1977 No. 633, No. 639).

37) Coser, L. A., *Men of Ideas* (New York, 1965) (高橋徹監訳『知識人と社会』培風館 1970).

科学者、デムーラン、エベール:ジャーナリスト、ジャック・ルー:聖職者、ロンサン:劇作家、
 というように経歴表は知的職業で占められている。そのかぎりでフランス革命の解放力は知識
 人によって担われたとも考えられよう。だがしかし、あの恐怖政治時代の公安委員会（1793～
 94）メンバー12名はすべて知的職業経験者であったことも忘れてはならない。その内訳は弁護
 士7名、法学士1名、将校1名、技術者1名、俳優1名、牧師1名であった。むろんわたしは、
 恐怖政治だから抑圧的政治であったと一義的に言うつもりはない。ただ知識人の政治への関与
 が高邁な理念の実現にも殺戮にもいたるという、その揺れ幅のひろさを指摘しているだけだ。
 またフランス革命に先行するアメリカ独立革命について言えば、その指導者が高邁な理念の実
 現を語りながら、他方かれらのおおくは植民地において社会的上昇志向をもちつつも、しかし
 重要な社会的地位はすでに本国人によって先取されていた「社会的地位を奪われた déclassé」
 知識人であったこと³⁸⁾、つまり特殊利害を普遍的言語に託す知識人であったことを忘れてはなら
 ない。

左翼革命を見てみよう。ロシア革命指導者の社会的出自が知識人層であったことは、すでに
 コーザーの指摘するところだ。しかしここでは、ロシア革命における機関紙『イスクラ』の位
 置と前衛党論に注目しておきたい。機関紙『イスクラ』が革命史上重要な役割をはたしたこ
 とはよく知られているが、革命家たちを結びつけたのがパブでもサロンでもなく、言論機関であ
 ったということが重要なのである。つまり、そこに結集したボルシェヴィキたちは無学ではつ
 とまらない。かれらは「シンボルの専門家」³⁹⁾（ラスウェル、ラーナー）であることがまず必要と
 された。この専門家たちが前衛党に結集する。じつはレーニンの前衛党論じたいが、マルクス
 において不鮮明であった知識人の位置を革命運動のなかに確定しようとする努力であった。レ
 ーニンはこれによってはじめて知識人の役割を革命運動の前面に押しだすことができたのであ
 る。レーニンはこう言う。

「（ロシアにおける）社会民主主義の理論的学説は、労働運動の自然発生的成長とはまった
 く独立に生まれてきた。それは、革命的社会的インテリゲンチェのあいだでの思想の

38) Cf. Gouldner, A. W., *The Future of Intellectuals and the Rise of the New Class*. esp. pp. 62-63
 「マージナル・マン」としての知識人と社会運動（左にせよ、右にせよ）の関係を明確に語ったのはラー
 ナーだった。かれは第一次大戦後の知識人をこう語る。「戦後のヨーロッパを革命化した『新しいアイデア
 をもつ新しい人』は、貧困化し残酷な仕打ちをうけたプロレタリアではなく——ある程度の上方への社会
 移動を経験し、ある程度の経済的報酬をえ、政治権力を欲している、欲求不満の、執念深い中間集団であ
 ったという歴史的事実を記しておくことは重要である」。Lerner, D., "The Coercive Ideologists in Per-
 spective" in Lasswell, H. D., and Lerner, D., (eds) *World Revolutionary Elites, Studies in Coercive
 Ideological Movement*. (Cambridge, Mass., 1965) p. 459. グールドナーはラーナーからおおきな影響をう
 けている。

39) Cf. Lasswell, H. D., "The World Revolution of Our Time: A Framework for Basic Policy Research"
 in Lasswell, H. D., and Lerner, D., (eds) *World Revolutionary Elites*. ここでラスウェルは「近代化する
 知識人の永遠の革命」という考えを提示する。これもまたグールドナーに受けつがれる。

発展の自然の、不可避的な結果として生まれてきたのである。⁴⁰⁾」

したがって、レーニンにおける知識人・前衛党・権力の関係をコンラードとゼレーニイが次のように定式化したとしても、それはなんら不思議ではない。

「ボルシェヴィズムへの第一のステップは、ラディカルな知識人はもっぱら労働者階級の利害を代表することに満足する必要はないし、じじつそれはできないのだということの認識であった。……レーニンにとって労働者党の機能は、労働者の利害を代表することではなく、権力掌握の準備をすることであり、新しい形態の国家権力の組織的原器として役立つこと⁴¹⁾であった。」

じじつこの知識人の党は、ラーナーの言うように、やがて「シンボルの専門家」から「暴力の専門家」へとひきつがれ、その組織的⁴²⁾原器として生きのびてゆく。それはレーニンの政治局からスターリンの政治局への移行であった。

では、中国革命はどうか。ここでも知識人のはたした役割はおおきい。まず注目されるのは、政治革命に先行する文化革命の存在である。陳独秀、季大釗、胡適らの文学運動は大学知識人が中心となって担われた。かれらもまた「シンボルの専門家」であった。イデオロギー的地ならしの後に政治革命が成功する。だがこの政治革命も、その中核は圧倒的に知識人であった。ノースとプールによれば、1965年までの中国共産党政治局員でその経歴が知られている29名（不明は13名）について言えば、高等教育をうけていないのはわずか2名にすぎず、残りの27名のうち25名までが留学経験者⁴³⁾であった。

左翼革命において知識人が重要な役割を演じたという事実は、その他いくらでも例をあげることができる。ヴェトナム革命に先行する⁴⁴⁾文紳・勤王運動の文紳たち、またのちのヴェトナム共産党の指導者たちはこの文紳の息子たちであったという事実、クメール革命とその後のポル・ポト政権の指導者のおおくが教員であり、あまり知られてはいないが現副首相キュー・サンファン⁴⁵⁾はパリに学んだ経済学博士である。

しかし以上の事実をもってわたしたちは、知識人を単純に左翼「革命的知識人」として一般

40) レーニン 前掲書 50頁。

41) Konrád, G., and Szelényi, I., *op. cit.* pp. 130-140.

42) Cf. Lerner, D., *op. cit.* また、知識人と政治局の関係については、次の論文を参照せよ。Schueller, G. K., "The Politburo" in Lasswell, H. D., and Lerner, D., (eds) *World Revolutionary Elites*, pp. 97-178.

43) North, C. C., with Pool. I. D., "Kuomintang and Chinese Communist Elites" in Lasswell H. D., and Lerner, D., (eds) *World Revolutionary Elites*, p. 381.

44) 「文紳」とは科挙に合格しながら登用はされずに土地に残った「déclassé の」知識人であった。文紳・勤王運動については、次の論文を参照せよ。池端雪浦、真保潤一郎「十九世紀の東南アジア社会」(岩波講座『世界歴史 21』1971 81-137頁)。

45) キュー・サンファンの博士論文は次のとおり。「カンボジア経済と工業化の問題」(人民新聞論文学習グループ訳『カンボジアの悲劇』所収 成甲書房 1979) 87-128頁 ただし抄訳である。

化してはならない。かれらは右翼革命にも重要な関与をおこなってきたのだ。このことは、「権力掌握以前のムッソリーニのファシスト党やヒトラーの国家社会主義党を積極的に支持した中核部分を構成したり、第二次大戦前のフランスや東欧諸国のファシストやそれに類した反ユダヤ主義極右グループを構成したりしたのは知識人や学生であった」⁴⁶⁾(リプセット&ベイズ)という事実を想起すればいい。この点はもはや古典となったラーナーの『ナチ・エリート』に詳しいが、ひとつだけ例証をあげておけば、ナチスの「シンボルの専門家」のうち大学教育を受けたものは約60パーセントという高率を記録しているのである。⁴⁷⁾

さきに中国共産党について述べた。かつて中国を二分した勢力は、この共産党と国民党であった。一般にはそれぞれの支持基盤は共産党が農民大衆、国民党は大土地所有者と言われるが、共産党の指導者が圧倒的に知識人であったことはすでに述べたとおりである。だが、事情は国民党も同様だったのである。さきに引用したノースとプールのデータによれば、国民党中央執行委員会メンバー281名のうち、経歴が知られている者261名、このうち高等教育をうけていない者はわずか2名にすぎない。259名が高等教育をうけており、そのうち136名が留学経験者である。⁴⁸⁾

以上のとおり知識人は左翼革命にも右翼革命にも重要な関与をおこなってきた。むしろそれぞれの革命を歴史の解放と抑圧に単純に対応させることはできない。左翼革命に関与した知識人が必ずしも民衆の解放勢力ではなかったことは、よく知られた事実である。この点はスターリニズムとポル・ポトを想起すればいい。つまり知識人の歴史的両義性は、たんに左翼―右翼という軸だけでとらえきれるものではなく、ここに知識人―民衆の軸を設定しなければならない。こうしたとき、「権力を批判」し、「権力を内部から切り崩し」て民衆を解放するとともに、「権力の座につき」、「権力を合法化」(コーザー)して民衆を抑圧してきたという知識人の歴史的両義性が浮かびあがってくる。この民衆との(つまりは、権力との)アンビヴァレントな知識人の関係は、次のようなかれらの精神分析によって光をあてうるかもしれない。

Ⅱ サディズム・マゾヒズムの性格 ―― 知識人の精神構造に目を転じれば、そこにわたしたちは民衆にたいするかれらのアンビヴァレントな感情を見ることができる。一般に知識人の能力 ―― 技術的能力(「社会実証主義」者)であれ、イデオロギー上の能力(マンハイム)であれ ―― を賞揚する人々は、民衆にたいしてサディスティックな感情をいだきやすい。「知の支配」を説いたベンサムがそうであった。かれにとって民衆は自由であるべきではなく、ただ

46) Lipset, S. M., and Basu, A., *op. cit.* p. 436.

47) ラーナーは、ナチス第三帝国の『指導者事典』に名のでている約1600名の「第三帝国」の指導者の経歴をあらいだし、指導者を三分類した。「シンボルの専門家」、「行政家」、「暴力の専門家」である。Lerner, D., "The Nazi Elite" in Lasswell, H. D., and Lerner, D., (eds) *World Revolutionary Elites* pp. 194-318.

48) North, R. C., with Pool, I. D., *op. cit.* p.381.

「幸福に」管理される客体でしかなかった。⁴⁹⁾ここにマンハイムを同列におくことには、異和感をもたれるかもしれない。しかし、その「貴族的」知識人論、「貴族的」大衆社会論のなかに、民衆への恐怖に裏うちされたサディズムを読みとることは不可能だろうか。この点はともかくとして、このような心情に知識人がとらわれるのは、自己の能力と未来との関係においてである。自己の能力を肯定する知識人は、この能力の展開のなかに理想を見る。カークパトリックの言うように、右であれ左であれ、改良主義的知識人は「現実を理想と一致させよう」⁵⁰⁾とするのであり、そのための武器が自己の能力というわけだ。したがって、現実が理想がいまだ実現されていない未発達な社会としてとらえられ、民衆とはこの現実を構成している主たる要素ということになる。知識人が未来を切り開くものとしてみずからの能力を肯定すればするほど、民衆は墮落した無知な存在としてイメージされる。

しかも無知こそ知識人の最大の敵でもある。なぜなら、かれらの権力は説得と論証というきわめて知的なプロセスをとおしてその正当性をうるからであり、無知はこのプロセスの埒外に存在するからである。無知は知識人の権力に正当性をあたえられない。では、かれらは民衆の啓蒙へとむかうのか。そうもいかない。まったくパラドキシカルなことだが、この無知な民衆が完全に啓蒙しつくされるという状況を想定することも知識人にはできない。というのは、すべての人間が啓蒙される可能性を認めることは、かれらの特権的な社会的地位が否定されることにつながるからである。したがってかれらは、一種の啓蒙への絶望と恐怖とでもいうべき感情にとらわれる。しかし、厄介なことに、啓蒙を断念することもかれらにはできない。なぜなら、かれらの権力を正当化する論理の外部に民衆が存在するとすれば、いわば民衆とは知識人にとって「不可視」の存在であり、これを可視化しなければ権力の安定はないからである。啓蒙を恐怖しつつ啓蒙をおこなわざるをえないところに啓蒙にたいするかれらのアンビヴァレンスがあり、知識人の権力の脆弱性がある。そこで「教育」と「計画」の必要が説かれる。⁵¹⁾しかしこの「教育」とは、民衆を可視化し従属させるための教育とならざるをえない。つまり「教育」は、民衆を管理し、一定の方向へ水路づけるための道具として必要とされるのである。歴史的事実として言っておけば、ベンサム、サン・シモン、コントという「知の支配」の思想がフランス革命の直後に出現したことは興味ぶかい。知識人の自己の能力にたいするオプティミズムは、民衆への絶望とかれらを管理しつくそうというサディズムによって裏打ちされていた。

逆に知識人は民衆への徹底した自己犠牲やかれらにたいするマゾヒズムに酔うことがある。このマゾヒズムの主流は、アナキズムの思想家によって構成されている。たとえば地質学者クロボトキンがその学問を断念したときの言葉はこうだ。

49) 拙稿「J. ベンサムにおける管理の理論」(『金城学院大学論集』96号 1982) 参照。

50) Kirkpatrick, J. J., "Politics and the New Class" in Bruce-Briggs (ed) *The New Class?* p. 37.

51) Bruce-Briggs, B., *op. cit.* p. 10.

「私の周囲にあるものが、貧困とひと切れの微くさいパンのための戦いだけであるときに、どうして私だけにそのような（学問という）高い喜びを経験する権利があるだろう。……一方では人類を進歩させることについてもっともらしく語りながら、他方ではその進歩を促進させようとする人間が前進させようとしている民衆から遠く遊離して立っていたのでは、それはいらだたしくなるような矛盾をふるい落とそうとやっきになっている連中のたんなる詭弁でしかない。」⁵²⁾

こう語ってクロボトキンがロシア地理学協会の書記を辞退して民衆へと接近してゆくのだが、このときかれに社会的地位の放棄を決心させたものは、既成の知の体系はすでに支配の体系に転化してしまっているという認識であり、そのなかに安住していた己しんを告発するという視点であった。みずからの科学的能力のなかに墮落の種子が宿っていると認識した者は必然的に自己批判にいたらざるをえず、ここから自己犠牲への途が開かれてくる。

この自己批判と自己犠牲を媒介するのが、民衆がもつ（とかれらが想定する）「合理性」の信奉である。「民衆にゆったりとした人間らしい生活を与えてみたまえ。諸君は民衆の思想の深い合理性に驚くであろう」という言葉は、バクーニンがナロードニキの青年たち、つまりロシア民衆にたいする「真に献身的な青年層」に贈った言葉であった。自己の能力に否定的エレメントしか見いだせない知識人は、自己の外部、つまり民衆の自発性や「合理性」に未来の可能性を託さざるをえず、この民衆に奉仕することで自己のアイデンティティを確立しようとする。それはマゾヒズムを媒介にしたアイデンティティであった。（最近の我国の「社会史」の流行をこの文脈で語れないことはない。）このマゾヒスティック・アイデンティティは、あの苦しい工場生活からもどったヴェイユの次の言葉によくあらわれている。ヴェイユはこう語る。

「こういう苦しかった生活から現在の生活へもどったために、自分が墮落したような気がするの。……このまま、ずるずる身をまかしてしまえば、何もかも忘れてしまい、特権の中に安住してこれが特権であることも考えなくなってしまいそうよ。安心してちょうだい。引きずられて行きはしないから。」⁵⁴⁾

これを「禁欲」などという静態的表現でとらえてはならない。ここには自虐的快楽に酔うことによってしか特権を拒否し自我を支えることができないという危機感がある。

では、啓蒙についてはどうか。かれらはまず民衆の啓蒙へとむかう。しかしこの啓蒙は、既

52) クロボトキン, P.,『ある革命家の思い出』(高杉一郎訳 《世界教養全集》 平凡社 1962) 193頁。

53) バクーニン『国家制度とアナーキー』(左近毅訳 《バクーニン著作集 6》 白水社 1973) 293頁。

54) ヴェイユ, S『工場日記』(田辺保訳 講談社 1972) 221-222頁。

成の知への啓蒙ではない。それは民衆の自発性の培養であり、アモルフな民衆の「合理性」を言語化することであった。もうひとつ別の知の体系を樹立すること、バクーニンが「新しい知性」、「新しい科学」の必要を語り、マハイスキーが教育の全面的改善に社会主義の未来を見たのは、このような意味であった。自己の能力と特権にたいするペシミズムを民衆へのマゾヒズムによって昇華し、「そこにある」と想定した「合理性」を彫琢すること——もしイデオロギーが不可視な世界の発掘と言語化にあるとしたら、かれらは徹底したイデオログとなる。

三

さて、前節において知識人(論)の多様性と知識人の両義性について述べておいたが、ここではこの問題を知識人を知識人たらしめているふたつの要因、イデオロギーとテクノロジーのレベルで考えてみよう。というのは、イデオロギーとテクノロジーの関係とその未来のなかに知識人の両義性の未来もあると考えるからである。

ただここでは、イデオロギーをマルクスの意味あい(社会的存在によって拘束されたアイデアの体系)では用いない。そうではなく、社会構造を可視的にし(“What is”の明示、たとえば「国家」、「階級」、「権力」などの可視化)、それを基礎にして人々を動員する(“What is to be done”の明示)シンボル体系として用いる⁵⁵⁾。したがって、知識人のイデオロギー機能と言ったとき、それは知識人の超越的機能、目的指定行為を意味する。イデオロギーとは、telos(コンテラド&ゼレーニ)に関与する知識人のintellect(ホーフシュタッター⁵⁶⁾)の産物である。

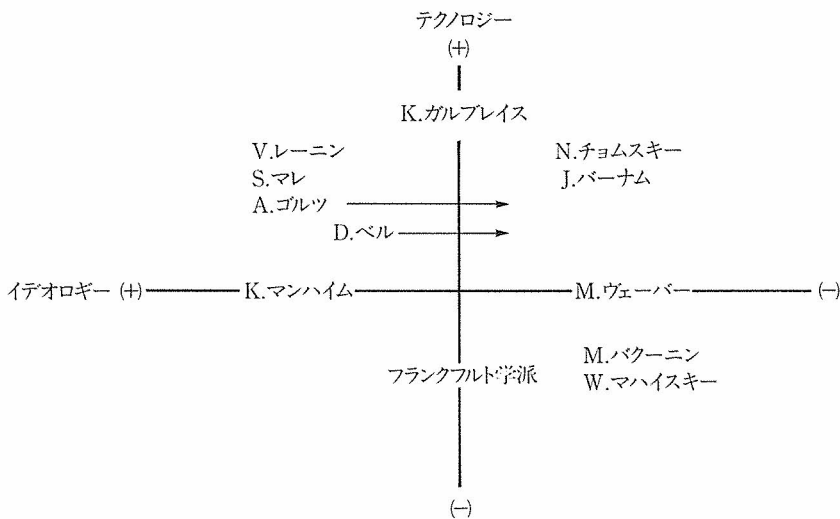
これにたいしてテクノロジーとは、ある目的のために用いられる客観的法則性を媒介とした目的合理的行為もしくはその手段の総体として用いる。したがって、知識人のテクノロジー機能と言ったとき、それは知識人の技術的卓越性および特定の目的を手段的に正当化する行為を意味する。テクノロジーとは、知識人のintelligenceにもとづくtechnéの総体である。イデオロギーの主体を「人文系知識人」、テクノロジーの主体を「技術的インテリゲンチァ」(グールドナー)と呼ぶことも可能だ。

さて、前節で述べた知識人論の混乱および知識人の両義性は、このイデオロギーとテクノロジーの双方への二価的評価にもとづいていることがおおい。たとえば、テクノロジーへの一方的評価をおこなったときにはガルブレイス流の「テクノストラクチャー」論が生じ、イデオロギーへの一方的評価はマンハイムの「浮動するインテリ」論をうむ。テクノロジーの必然性と

55) これはグールドナーの用法である。Cf. Gouldner, A. W., *The Dialectic of Ideology and Technology*, esp. Chapter 2 “Ideological Discourse as Rationality and False Consciousness” pp. 23-66.

56) ホーフシュタッターのintellect—intelligence 概念は次のとおり。「intelligence が把握、操縦、再調整、整序につとめるのに対し、intellect は吟味、熟考、驚嘆、理論化、批判、想像を追求する。intelligence は状況における即時的意味をとらえ、これを評価する。intellect は評価を評価し、状況の全体としての意味をさぐるのである。」Hofstadter, R., *Anti-intellectualism in American Life* (New York 1963) p. 25.

イデオロギーの崩壊にたいする否定的評価からは「魂なき専門人」(ヴェーバー)のイメージが、その肯定的評価からは「脱工業化社会」論(ベル)のイメージがえられるし、イデオロギーとテクノロジーを肯定的に媒介することによって「前衛党」論(レーニン)や「新しい労働者階級」論(マレ)がうまれる。またフランクフルト学派は、テクノロジーの必然性にたいする危機感を語ったのだった。したがって、知識人(論)の多様で両義的イメージは、次のようなイデオロギーとテクノロジーにたいする評価軸のもとに整理することができるだろう。とするならば、知識人をいかにとらえるかという問題は、また知識人が歴史において重要な役割を演じ歴史を稼動させてきたとするならばその歴史は、イデオロギーとテクノロジーの矛盾、対立、媒介のプロセスとして把握することが可能だろう。コンラードとゼレーニイが「知識人の歴史は、(超越的な文化創造という)かれらの普遍的役割(telos)と(特定の利害関心に奉仕するという)かれらの^{ジェネティク}発生的役割(techné)とのあいだの一連の抗争として描くことができる」⁵⁷⁾(括弧内原田)と言ったのは、このような意味であった。



しかし、従来の知識人論の混乱と知識人の両義性が以上のような図式で整序されうるとしても、この図式は今後とも有効であろうか。というのも、現代はイデオロギーとテクノロジーの弁証法的融合が進行中だからである。それはこういうことだ。現代においてイデオロギーは、もはやテクノロジーなしには存立しえなくなっている。今日のイデオロギーは、伝統や宗教を基礎とすることはできない。なぜなら、科学技術が発達した現代において、イデオロギーの目的論的過程がとかくおちいりがちな不可知論を解決しうる能力をもはや伝統や宗教はもち

57) Konrád, G., and Szelényi, I., *op. cit.*, p. 12.

あわせていないからだ。けっきょくこの能力は、科学技術的能力に依拠せざるをえない。つまり “What is” の明示は科学的言語と方法にもとづかざるをえないし、ここから “What is to be done” にいたるためには客観的論証が必要である。『資本論』と「科学的社会主義」のイデオロギー的意義はここにあった。世界の構造が明らかになってゆくにつれて、無根拠な信念やたんなる伝統は説得力をうしななってゆき、イデオロギーはますます「合理化」されてゆく。だいいちイデオロギーは、「テクノロジーカルな現実」をまず「合理的」に説明しつくす必要がある。また、“What is” と “What is to be done” を媒介するものが技術論 (“How to do”) であるわけだ。したがって、たとえ既成のテクノロジーを否定するイデオロギーであっても、それはテクノロジーじたいの否定へとむかうのではなく、もうひとつ別のテクノロジーを志向するのである。この意味でイデオロギーはテクノロジーの保証なしには存続しえない。したがって、個々のイデオロギーの説得力は、否定しようもない「テクノロジーカルな現実」を合理的に可視化し、そこからひきだされる「何をなすべきか」というテーゼをいかなるテクノロジーによって保証するかにかかっている。技術論の介在しないイデオロギーは、現代においては無意味なのだ。

逆のプロセスもまた進行中である。つまり、かつて「イデオロギーの終焉」論が想定したのとはまったく逆に、テクノロジーの十全の展開はイデオロギーを放逐するどころか、いまやイデオロギーの活動領域をおしひろげ、ますますその意義を拡大しつつある。じつはテクノロジーがそれじたいとして正当化されるのは、テクノロジーが未発達な状況の特徴であった。そのような状況においては、あるテクノロジーカルな発達は唯一不変のものとして絶対化されやすい。つまり、手段の目的化は手段の貧困状況にもとづいていた。しかしテクノロジーが発達すればするほど、そこにはテクノロジーの多様性が生まれ、ここにイデオロギーが介入する余地が生じてくる。この点をラーソンはこう語る。

「技術的に成熟すればするほど、ある問題への多少とも技術的に等しい解決策は多様になるのだし、この技術的不確定性を解決するための技術『外』的配慮が介入する余地がひろくなる。したがって、これはたんに組織構造上、技術的領域がトップの管理者によって設定された『目的』の支配下におかれるというだけでなく、技術的『手段』や道具の選択もまた非合理的な所与として与えられた利害関心や規範によって影響をうけるであろうということである。性能上すぐれたテクノロジーの成熟は、テクノロジーの影響力を制限したり限界づけたりしている規範や利害関心を減少させるものではないのだ。⁵⁸⁾」

したがって、「イデオロギーの終焉」論はテクノロジーが未発達な段階においてこそ存在しえた

58) Larson, M. S., “Notes on Technology” *Berkeley Journal of Sociology*, XVII 1972-73. ただし引用文はグールドナーより孫引いた。Gouldner, A. W., *The Dialectic of Ideology and Technology*, pp. 256-257n.

のであって、いまやこの「終焉」論じたいが終焉せざるをえない状況にいたっている。

また、そもそも純粋なテクノクラシーというものは成立しえない。テクノクラートがひとたび権力を握るや、かれらは二重の任務をおわされる。ひとつは技術的専門家としての技術的任務であり、もうひとつは規範を彫琢する権力の目的論の独占者としての任務である。テクノロジーが権力と結びついたとき、テクノロジーはイデオロギーに依拠せざるをえなくなる。⁵⁹⁾

さらに、テクノロジーの発展が可能にした「豊かな社会」においては、テクノロジーじたいは所与化されてしまい、逆にイデオロギーが議論の俎上にのぼる状況がうみだされている。おもしろいことに、「イデオロギーの終焉」論者ベルから「脱工業化社会」論者ベル、そして「ネオ・コンサーヴァティヴ」ベルへの移行（ハリントンの表参照）は、このことを如実に物語っている。なぜ「ネオ・コンサーヴァティヴ」はロールズの『正義論』⁶⁰⁾を目の敵にするのか。⁶¹⁾なぜ「結果の平等」という配分正義（というイデオロギー）にたいして「機会の平等」というイデオロギーを対置するのか。それはテクノロジーの発達によってもはや交換正義の領域は凌駕されてしまい、配分正義という、いわば価値体系そのものを問題にすることが可能になったからである。経済・政治問題から文化問題へのベルの力点の移行は、テクノロジーとイデオロギーの弁証法に対応している。ベルほどテクノロジーの発展に対応させて（ある意味では真摯に）イデオロギー的翻身をくりかえした者はいない。このように現代は、テクノロジーの発達がパラドシカルにイデオロギーの意義を高めてゆく時代である。イデオロギーとテクノロジーの弁証法的融合とは、このことをさしている。

さて、現代においてイデオロギーとテクノロジーの意義がともに高まるとすれば、それぞれの主体である「人文系知識人」と「技術的インテリゲンチヤ」の存在意義も同様に高まる。かれらは「批判的言説の文化」⁶²⁾（ゲールドナー）という、いわば普遍的形式をもった言語文化を共有して、世界の可視化とそれに依拠する目的の設定、およびそのための手段の体系を供給する。あたかもかれらは、未来をひらく普遍的存在であるかのように見える。

しかし、この点についてはもうすこし慎重でなければならない。というのも、前節で述べた権力にたいするアンビヴァレンスをかれらがいかに生き延びるのかという問題がまだ処理されていないからだ。この点についての解答は、かれらを独自の利害関心をもち、権力を志向する

59) Cohen, J. L., *Class and Civil Society, The Limits of Marxian Critical Theory* (Amherst, Mass., 1982) p. 232n.

60) Rawls, J., *A Theory of Justice*. (Cambridge, Mass., 1971) (矢島釣次監訳『正義論』紀伊国屋書店 1979).

61) 「ネオ・コンサーヴァティヴ」については、佐々木毅「現代アメリカの選択肢」(『世界』1983年2月)、中野秀一郎『アメリカ保守主義の復権』(有斐閣選書 1982)を参照せよ。また、ベルのロールズ批判は Bell, D., "The New Class: A Muddled Concept" in Bruce-Briggs (ed) *The New Class?* pp. 169-216 を参照せよ。

62) Cf Gouldner, A. W., *The Future of Intellectuals and the Rise of the New Class*. esp. Thesis 6 pp. 28-42.

「特殊な階級」としてとらえることによってえられる。つまり、「権力を批判」し、「権力を内部から切り崩し」たり、「権力の座につき」、「権力を合法化」したのも、すべてかれらじしんの「階級的利害」にもとづいていた、と考えることだ。こうとらえたときはじめて、かれらが歴史のポジにもネガにも関与したことが説明されうる。その利害関心を満たすかぎり、かれらは左翼にも右翼にも与しえたのだった。「新しい階級は、不可避免的にまた生得的に左翼もしくは右翼につくのではない。かれらはリベラル・エリート主義にも、労働者や貧しき者と同盟する民主政治にもむかう傾向をもっている」⁶³⁾（傍点著者）と語ったのはハリントンであったが、この傾向をどちらに決定するかは、かれらの「階級的利害」にかかっている。

知の資本論の系譜は、知識人が特殊な階級を構成しているという認識の論拠を提供してくれるだろう。「科学的」知そのものが支配の根拠だという認識は、すでに「社会実証主義」者であった。たとえばベンサムは、「服従は知にたいする知の威光が存在するところに存在すべきである。つまり人々は、知識をもつ人、とりわけ道徳と立法についての技術と科学をもつ人には服従しなければならない」⁶⁴⁾と語っている。しかし、この知を「資本」としてとらえ、知識人の支配の論拠として語ったのは、アナキストたちであった。バクーニンにおいてははまだ知は貨幣資本とのアナロジーとして比喩的に語られているにすぎないが、マハイスキーははっきりと「知識人の資本はかれらの知識にある」⁶⁵⁾と語った。この知の資本論の系譜はやがてラスウェル（「知識人の『資本』はかれの学識 learning にある。かれは社会における安全、収入、尊敬をうるために、土地所有者、産業企業家、そして肉体労働者と競合していると考えられよう」⁶⁶⁾）、シュンペーター（「知識人とは語られた言葉、書かれた言葉の権力をふるう人である」⁶⁷⁾）、ラーナー（「新しいアイデアをもった新しい人」⁶⁸⁾）へとひきつがれ、グールドナーにおいて「文化ブルジョアジー」⁶⁹⁾という概念にまとめあげられる。

知の資本論ははまだ十分な理論的展開をとげているわけではないけれども、しかしけっして根拠のない発想ではない。もともと古典経済学もマルクス主義も財および非知的労働力が優位な社会の産物であって、知識が生産に直接的に重要なインパクトをあたえる時代の産物ではなかった。だからこそ、知識の存在によって規定される側面を一義的に強調することもできたの

63) Harrington, M., "The New Class and the Left" in Bruce-Briggs (ed) *op. cit.*, p. 134.

64) このベンサムの言葉は、次の著作から孫引いた。Steintrager, J., *Bentham* (New York, 1977) p. 119.

65) Cf. Lasswell, H. D., *The World Revolution of Our Time*, p. 29.

66) Lasswell, H. D., "World Politics and Personal Insecurity" in *A Study of Power* (Glencoe, Illinois, 1950) p. 112.

67) Schumpeter, J. A., *Capitalism, Socialism and Democracy*. (London, 1943) p. 147 (中山・東畑訳『資本主義、社会主義、民主主義』東洋経済新報社（上）1952）257頁。ただし訳文はかえている。

68) Lerner, D., "The Coercive Ideologists in Perspective" in Lasswell, H. D., and Lerner, D., (eds) *op. cit.* p. 458.

69) Gouldner, A.W., *The Future of Intellectuals and the Rise of the New Class*, esp. Thesis 5, pp. 18-27.

である。しかし、現代は事情がことなる。もし資本を「剰余価値をうむことによって自己増殖する価値」と定義するなら、今日の知識（主として科学技術的知識）は資本としての要件を十分そなえていよう。高度な知識はたえず希少性をもっており、しかも今日それは生産に直接的に関与して新しい価値をうみだしている。したがって、いまや知識こそが収益の源泉となっているのである。その典型的例は、昨今の情報産業の発展のなかに見ることができよう。さらに資本の機能について言えば、資本はその投下差止めという手段を用いることによって資本所有者の発言権を増加させ、収益を確保し、社会的地位を上昇させたり、支配権を掌握させたりするのだが、いまや知識は同様の機能をはたしている。したがって、この知識の所有者である知識人を「文化ブルジョアジー」と呼ぶことも可能であろう。

知識人を「文化ブルジョアジー」と規定したとき、権力にたいするかれらの複雑な関係とその歴史的両義性が了解される。既成権力に安住することが「文化ブルジョアジー」としてのかれらの階級的利害に一致するかぎり、かれらはこの権力の「下僕」ともなろう。しかしそこに不一致や抑圧を感じれば、かれらはこの権力を批判し、抗争し、これを転倒させるよう動きだす。その方向が左翼革命にいたるか、右翼革命にいたるかは、いずれの革命にかれらの利害関心の実現を読みとるかにかかっている。歴史的にみれば、知識人が左翼革命に加担した例はおおいのだが、それはかれらがプロレタリアートという連帯者を見いだすことが容易だったからである。旧い金権ブルジョアジーはかれらの共通の敵となり、左翼革命ブロックが成立する。しかしこのブロックは不変のものではない。旧ブルジョアジーが打倒されたのちに、知識人とプロレタリアートは不安定な関係におちいらざるをえない。ロシア革命後の「シャフトゥイ事件」(1928)、^{プロムバルチア}「産業党事件」(1930)を知識人とプロレタリアートの抗争という文脈で（ただし知識人の敗北として）⁷⁰⁾読むことも可能だし、パリ5月革命の挫折をこのような文脈で（ただし知識人のアジテートとドロップ・アウトとして）⁷¹⁾読むことも可能だ。典型的には中国文化大革命の「紅」と「専」の対立を想起すればいい。したがって、「文化ブルジョアジー」としての知識人は戦略的にプロレタリアートと連帯することはあっても、プロレタリアートになることはない⁷²⁾のである。知識人は、かつてのブルジョアジーと同じように、解放勢力であると同時に抑圧勢力である。

さて、現代においてイデオロギーとテクノロジーの弁証法的融合はすすみ、それらの意義がいっそう高まっていることについてはすでに述べておいた。それらの主体が知識人であるかぎ

70) Cf. Bailes, K. E., *Technology and Society under Lenin and Stalin* (Princeton, New Jersey, 1978) esp, Ch., 3-4 また、メドヴェーデフ『共産主義とは何か』（石堂清論訳 三一書房 1973）（上）第4章も参照。

71) Cf. Gorz, A., "Techniques, techniciens et lutte des classes" *Les Temps Modern*, Aout-Sep. 1971.

72) ラスウェルはこう語る。「大衆に依存して行動はするけれども、心理学的には大衆とともに行動するのではない人々がいる」（傍点著者）。Lasswell, H. D., "World Politics and Personal Insecurity" p. 100.

り、かれらの存在は不可避なものとしてありつづけるだろう。しかし、この知識人が「ブルジョアジー」としてとらえられることも述べておいた。とすれば、わたしたちは知識人にどのようなイメージをむすべばよいのか。グールドナーは、以上のような意味をふまえて、知識人を「⁷³⁾欠陥をもった普遍的階級」ととらえた。しかし、ここで肝要なことは、この「欠陥」を見据えることである。そして「欠陥」から運動へのプロセスを模策することである。“The Dark Side of Dialectic”の意義はここにあったはずだ。

この「欠陥」は知識人の権力の抑圧性と現代のテクノロジーがおしすすめる社会の技術的編制にある。そこになんらかの不安定な要素はあるだろうか。ふたつの点を指摘することが可能だろう。第一に、イデオロギーとテクノロジーは融合をつづけながらも、現代はテクノロジーがイデオロギーに依拠する必要性が高くなっている。テクノロジーによる社会の技術的編制が問題になればなるほど、テクノロジーを正当化する（もしくは批判する）イデオロギーの意義は高まる。「何のための知識か」という議論はいっそう激しくなり、このとき「人文系知識人」の役割が増大するだろう。ここに知の権力の不協和音の可能性がある。ここから第二に、「人文系知識人」のイデオロギー覚醒作用は、かれらのマゾヒスティック・アイデンティティに媒介されたとき、民衆のもつ感性、心性、「合理性」の発掘にエネルギーを集中させる。むろんかれらは科学的言語（「批判的言説の文化」）で民衆を語り、そのかぎりで民衆と同一化することはいりえない。しかし、テクノロジーが発達し民衆の「日常生活」を侵蝕すればするほど、かれらは民衆のこの「生活」への接近をつづけてゆく。とすれば、知識人の「欠陥」という「暗黒の側面」が未来をひらく運動へ転化するか否かは、テクノロジー—イデオロギー—「日常生活」の、つまり「技術的インテリゲンチァ」—「人文系知識人」—民衆というトリアーデの力関係にかかっているのかもしれない。

〔付記〕 本稿はじつにおおくの論点を語りおとしている。たとえば知識人の言語文化、かれらの体制からの離反のメカニズム、教育のもつ両義性、現代の知識人をめぐる経済構造（とくに就職構造）、さらに知の資本論はいっそうの理論的彫琢が必要であろう。しかしこれらの個別的テーマはもはや「序説」では語りつくせない。それらこそが知識人論の内容を構成するからである。別稿が必要となる。

73) Cf. Gouldner, A. W., *The Future of Intellectuals and The Rise of The New Class*, esp. Thesis 14, pp. 83-84.